# すこしふしぎ。

## 準備号

田舎学園不思議小説

# すこしふしぎ。

準備号

■

他人の代表

俺はここ、一品料理かずに住み込む事になったのだが、当然の如く、夜は手伝いをさせられる。
日曜は休みだが、土曜の昼も手伝いだそうだ。
まあ、それくらいはわけない。
前の学校にいた頃にアルバイトしなかったわけでもないし。
「まずはメニューが分からないと注文も取れないから、まずはお品書きを見て一通り覚えて」
服を着替えた早佳奈がメニューを差し出す。
「あんたはあんまりお客さんの前に出なくていいから。あたしの手が離せない時だけ出てもらうからね」
「分かった」
俺はメニューに目を通しながらそう答える。
「でもこの子、なかなか可愛いから、お客さんの前に出したら、女性客が増えるんじゃないの？」
和枝さんが早佳奈に言う。
可愛い。
よく言われることだが、男としてあまり嬉しくはない。
だが、俺は女の子緒から見ればとても母性本能をくすぐるタイプなのだそうだ。
だからこそ、昼のような同情をひくという特技を身につけてしまったのだが。
「あのね、家庭料理を売りにした居酒屋に女の人がそうそう来ると思う？」
「来てるじゃない。足立さんとか」
「あの人が珍しいの！　普通は来ないわよ自分で作れるような料理出す店なんて」
早佳奈の言葉に、和枝さんは不満もあったようだが、黙っていた。
娘の方がしっかり者のようだ。
「じゃあ、今日はお母さんの……」
早佳奈が俺を向き直り、指示を出そうとした時。
「あわわっ、きゃあっ！」
早佳奈の声は和枝さんの叫びにかき消された。

ぐしゃぁ

何だか鈍い音がした。
「お母さん？　どうしたの……あぁぁっ！」
「何だ？」
早佳奈の叫びに俺も振り返る。
「あ、卵が……」
見ると、和枝さんが割れた大量の卵にまみれていた。
その表情は、今にも泣きそうだった。
「大丈夫、お母さん？」
「ああ……でも、卵がほとんど割れちゃったよ」
情けなそうに言う和枝さん。
「あ～、もう。掃除はしておくから着替えて来て」
早佳奈は和枝さんを追い立て、掃除道具を取り出す。
「いつもすまないねえ」
……いつも？
いや、何も考えないようにしよう。
「いいわよ。それより卵がなくなっちゃったから、買いに行かなきゃ」
「あ、俺行ってくるよ」
この場にいても大して役に立ちそうにない。
お使いくらいなら出来るだろう。
「そう？　じゃあお願いね。元山鶏卵さんは駅の向こう側だから。道を真っ直ぐ行くと見えてくるわ」
早佳奈が言う。
この店が駅前だから、そう遠くないな。
「分かった」
「電話しておくからね。かずのお使いって言えば、分かると思うわ」
「ああ。じゃあ行ってくる」
俺はそう言うと、店を出た。

※

「ふう……」
重い。

俺の思っていたよりも卵は重かった。
店で使う分だからそれなりに大量になるのは仕方がない。
だが、抱えられる程度の数でもあったし、大丈夫かと思った。
ダンボールの中に、紙で作った簡易的な緩衝剤とともに卵は入っていた。
しかし、腕はすぐに悲鳴を上げた。
そもそも、来る時からきつくはあった。
早佳奈は「道を真っ直ぐ行けば見えてくる」と言った。
それは、都会育ちの俺にはせいぜい５０メートル程度の事だと思う。
だが駅裏に広がっていたのは地平線すら見えそうな広大な田畑。
確かに見通しのいいそこからは養鶏場と思われる建物は見えたが、いくら歩いても近づいて来ない。
やっとついたと思ったらこれだ。
「やっと、駅まで戻って来れた……」
俺はちょっと休憩したかった。
だが、俺の居候先は、駅を渡ったらもう少しだ。
腕は痺れてかなりまずい状態だが、もう少し頑張ろうと歩く。
腕の限界は近い。
自然、かなり早足になる。
辺りは徐々に暗くなってきている。
だから、これは起こるべくして起こったのかもしれない。
どんっ
「わわっ！」
何かが身体に当たる感触。
声が聞こえてきたということは人とぶつかったんだろう。
しかも、声からして女の子だ。
それは俺のバランスが崩れるほどではないが、限界寸前の俺の腕からダンボールを奪う程度には強

かった。

ぐちゃっ

不吉な音とともに広がる視界。
そこには女の子が尻餅をついていた。
どうやら俺はこの子とぶつかってしまったらしい。
「いたた……」
「ごめん、大丈夫？」
俺はとりあえず問いかける。
「うん。何とか大丈夫だよ」
女の子はそう言いながらゆっくりと立ち上がる。
その背は少し低く、顔立ちから見て、年下の子じゃないかと思う。
「ボクはいいんだけど、そっちは大丈夫？」
「ん？　いや、俺はなんともない」
俺はぶつかったと言ってもバランスすら崩してはいない。
「君じゃなくて、その箱」
「え？　ああっ！」
俺は自分の足元に落としたダンボールの存在を思い出す。
落とした。
確実に落とした。
これだけの高さから落としたんだから、何個か割れているかもしれない。
下手すると全部割れている可能性もある。
「ああ……ど、どうしよう」
あの母娘のことだ。事情を話せば許してくれるだろう。
だが、これ以上迷惑をかけるのは心苦しい。
「……」
女の子がじっと俺を見上げている。
「……今日は赤字になるんだろうなあ……」
だが、俺は今、自分のことだけで精一杯だ。
まあ、元をただせば和枝さんの失敗が原因であって、自分のせいだけではないにしろ、自分が赤字の

原因を作るのは耐えられない。
とは言え、起きてしまったことは嘆くしかない。
「大丈夫だよ」
女の子が明るく言う。
「……何が？」
俺はそれどころじゃなかったが、一応聞き返した。
「中のものは元に戻してあげたよ」
「へ？」
女の子が変なことを言い出した。
「ボクは魔法使いだからね」
その小さな口から出た、自信たっぷりの言葉は、日常会話ではまず使わない単語が混じっていた。
「……」
何かの喩えなのか、それとも皮肉なのか、もしかして本気で言ってるのか。
とにかく、彼女は俺がゲームをしている時にしか口にしないし耳にもしない言葉を吐いた。
「魔法使い……だって？」
「あ、その顔は信じてないね」
女の子は少しむっとするような、そしてやっぱり、と諦めたような顔をした。
「とにかく、ボクは元に戻したから。もう落とさないようにね」
「あ、おい」
女の子は黄昏の中に消えて行った。
取り残された俺は、地面に落ちた卵を見る。
「……魔法だって？」
信じるとか、信じないとか、そういうレベルの話じゃない。
幽霊やＵＭＡはもしかして、というのがある。
見たことがないだけで、その存在を否定できない。
だが、魔法はあまりにもファンタジーの世界の話だ。
あの子が何を思ってそう言ったのか分からないが、とにかく俺の方は現実を見るしかない。
俺の足元にはダンボール。
ぐしゃ、という音とともに落ちたダンボール。
その中身を確認しなければならない。

もしかして奇跡的に割れていないかもしれない。
俺はダンボールを開ける。
「……あれ？」
ダンボールの中には卵があった。
三重に重ねられた卵の段。
数十個の卵。
その全てが、元の姿を保っていた。
つまり、割れていなかった。
「どうして……？」
落とすとき、確かに割れるような音がした。
常識的に考えて、卵をあの高さから落とせば割れるだろう。
なのに、割れていない。

「中のものは元に戻してあげたよ」
「ボクは魔法使いだからね」

「まさか……」
分からない。

奇跡的に割れなかったのかもしれない。
あの子はそれに気付いて、悪戯でそう言ったのかも知れない。
とにかく、魔法なんてこの世にはない。
だとしたら、この現象をどう説明すればいいんだろう。
俺は悩みながら、店に戻った。

さて、そんなわけで、すこしふしぎ。の準備号です。
こんな少し不思議なファンタジー＆コメディ小説を冬に発行します。
冬コミに受かっていましたら冬コミ発行となるでしょう。
少し面白く、少し心暖まる、少し不思議な話を書きますので、よろしくお願いします。

道化童子


# すこしふしぎ。準備号

著者　道化童子
発行　他人の代表
http://www.tanin.jp/

印刷　他人の代表印刷
発行日　2006 年 10 月 1 日

他人の代表
http://tanin.jp/